

草の根市民による沖縄のジュゴン保護活動の構築

北限のジュゴンを見守る会

世界の分布の中で最も北に生息する沖縄のジュゴンはその数わずか数十頭と言われ、国の天然記念物としてまた絶滅危惧種として厳正に保護されなければならないが、米軍再編に関わる日米安保体制の中で、その最も重要な生息地に普天間飛行場代替施設の建設という脅威に曝されている。この沖縄のジュゴンの保護のためには、すでに再発見されてから10年以上かけても有効な保護策の打てない国に任せるのではなく、地域住民が主体となって保護策を講じなければ近い将来絶滅するのは明らかである。

この保護活動では、市民自身が担って行くジュゴン保護の方策を、沖縄のジュゴンにまつわる歴史と文化および国内外における先駆的・類似的な保護策から検討し、具体的な中長期計画の作成をめざすとともに、現在実施中の生息環境調査を専門家にチェックしてもらい今後の調査の方向性を再検討する。

また、市民自身による保護活動の地盤を作っていくため、日常的に誰にでも親しめる保護ブックレットの配布や観察会による環境プログラムを展開する。

【ジュゴン保護に向けて】

沖縄のジュゴンが直面している脅威は4つある。ひとつは、ジュゴンの唯一の食料である海草の藻場がひろがり彼らの重要な生息地となっている辺野古への普天間基地移設、2つ目は漁網による混獲、3つ目は不発弾によるサンゴ礁生態系の破壊、4つ目が開発等による生息環境の悪化である。これらのうち普天間基地移設は、近い将来ジュゴンの絶滅につながる可能性のある最も大きな脅威である。現在進められている環境影響評価で、2009年4月2日に準備書が出されたが、その評価結果は「ジュゴンは辺野古にいないので、基地がジュゴンに与える影響はほとんどない」というものであった。準備書における影響の予測・評価の根拠は知見がないか不足、あるいは不適切なもので不審な点が多く、到底そのまま納得できるものではない。諫早干拓問題、石垣新空港問題などにおいても、科学者たちがアセスの結果に異議を唱え、事業の影響について正当な評価を提示し、警告しているにもかかわらず、事業は強行されてきた。これらの事例のように、この影響評価が通ってしまい工事が着工されれば、日本のジュゴンは存亡の危機に立たされることになる。

当会は、このさしせまった危機に対し、まずこの環境影響評価に対しやり直しを求めて粘り強く抗議し続けるとともに、これまで実施してきた食跡調査を継続、強化し、ジュゴンの生息状況に変化が生じた場合には、即座に工事の中止を申し入れるよう市民による監視体制を作っていく。また、環境影響評価の調査によりジュゴンの個体数が非常に少ないことが示され、事態が危機的であることを鑑み、ふたたび研究者の指導を仰ぎ、調査の方向性と保護対策について検討しつつ活動を進める予定である。

(1) ジュゴン生息環境の継続的モニタリング(食跡調査)の継続と強化

ジュゴンはその唯一の食糧である海草を根こそぎ食べることからその跡はトレンチ(溝)として残される。そのため食跡と周辺海草の状態を調査することでジュゴンの生息状況を推測し生息環境を把握できる。このような調査を定期的に継続して実施することは、何より、ジュゴンの生存を確認し、基地の移設も含めた人間活動の影響を評価する上で非常に重要であるが、その実施は地域との連携なくしては不可能である。また、このような活動を通しての地元住民との交流は、生物多様性豊かな地域の生態系の重要性についての理解、ひいては

ジュゴンにとっての大きな脅威である混獲の対策への理解につながるものとする。2007年1月には地元モニタリング調査チームを組織し、専用ボートの確保、調査コアメンバーの固定、メーリングリストやHPの作成、基地反対運動との連携などの基礎的な体制が整った。

2008年度は県内だけでなく、県外各地からのボランティア参加を受け、チーム内外からの視野は現地調査体制を大きく成長させた。また、ジュゴンの生息環境の重要な要素である海の水質調査にも着手し、より地域レベルでの広がりを模索してきた。

2009年度は、新たな基地によりもたらされるジュゴン生存の危機を回避できるよう、前述のように調査体制をより強化し、多くの市民の協力を得ながら、保護対策に取り組んでいきたい。

(2) 市民の環境プログラムの提案

ここ2年間は食み跡調査のスキルアップとデータの集積法を基本に春期、秋期の2シーズンに分けて調査を実施、合間に陸上の学習会や一般市民への観察会を試してきた。

その中で、地域におけるジュゴンへの周知と呼応して、一般市民へのジュゴンに関わる環境学習活動の必要性が顕著になってきた。

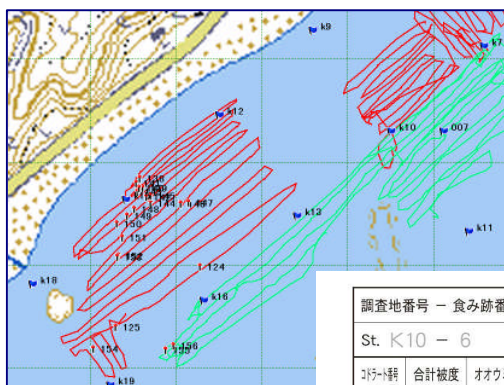
今後は集積したデータの分析と保護へのロードマップを試作するプログラムと共に、新たに市民に向けて「ジュゴンに関わる環境学習」プログラムを組む。

また、昨年度から調査活動の手引きとなる「マンタ法によるジュゴンの食み跡ハンドブック」や活動紹介のDVDを作ったが、新たな課題を盛り込みながら、より市民むけに親しみやすい「ジュゴン保護ブックレット」の制作企画を試みる。

(3) 地域からの保護プログラムへの模索 - ジュゴン保護運動の開始から10年目

2009年は日本における沖縄のジュゴン保護運動の開始から10年目にあたる。過去に関わった国内外の研究者を招聘した企画も検討し、10年間のジュゴン保護運動を総括し、新たな連携と歩みを模索し、2010年の国連が定めた国際生物多様性年に向けて海生哺乳類保護の気運を高めたい。

今後の継続的なモニタリング調査の中で、沖縄のジュゴンの保護と海洋環境の保全に向けての課題を解明し、地元住民の歴史・文化的聞き取り及び埋もれた文献調査の発掘から問題解決に向けてより科学的で実効性のある提案と実践を試みる。その中で生まれた地域からの保護プログラムは取りも直さず地元住民とジュゴンとの共存可能な社会へのロードマップになるであろう。



【食跡調査のようすと調査結果の一例】

調査地番号 - 食み跡番号		時刻	水深	底質	27.14451 °N	長さ					
St. K10 - 6		11:30	1.9 m	砂	129.12020 °E	1.65 m					
15→経	合計被度	オオウミヒ	ウミヒ	リスガ	ベニア	リアマ	ホウバ	ウミジ	マツバ	幅	深さ
1	25	3		12		5		5		17 cm	2.5 cm
2	20			15		3		2		20 cm	2.5 cm
3	30			15	+	10		5	+	18 cm	3.0 cm